

【書評】

關浩和著『情報読解力形成に関する社会科授業構成論』

(風間書房, 2009年) 13,000円

加藤 寿 朗

(島根大学教育学部)

本書は、關浩和氏が2005(平成17)年に兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科へ提出された学位論文を補訂し、公刊されたものである。

關氏は広島大学附属小学校での勤務をはじめとする長い教職経験の中で、多くの優れた授業を実践され、それを理論化した数々の著書を既に刊行されてきた。最近のものでは『情報リテラシーと社会科授業の改善』(明治図書, 2007年)や『ウェビング法—子どもと創出する教材研究法—』(明治図書, 2003年)などがある。本書はこれらの成果をふまえながら、新たに構成主義的アプローチを視点とした情報読解力形成に関する社会科授業構成論についてまとめられたものである。

本書は以下の章から構成されている。

序 章 本研究の目的と方法

第I章 構成主義的アプローチの性格と社会科授業構成

第II章 構成主義的アプローチを視点とした社会科授業構成論

第III章 認知的所与型教材活用による授業構成論

第IV章 認知的促進型教材活用による授業構成論

第V章 認知的構築型教材活用による授業構成論

第VI章 協働的所与型教材活用による授業構成論

第VII章 協働的促進型教材活用による授業構成論

第VIII章 協働的構築型教材活用による授業構成論

第IX章 情報読解力形成をめざす社会科モデル授業開発

終 章 研究の意義と課題

社会科とは、そもそも子どもが中心になって、自分たちが生きている社会を研究するための教科である(8頁)。本書は、このような社会科の授業構成の基盤となる学習理論を構成主義に求め、社会科授業構成のあり方について論究している。

まず、第I章において構成主義的アプローチを

視点とする社会科授業構成の有効性について論じている。第II章では、情報読解力形成に関する社会科授業の役割を論じるとともに、構成主義的アプローチを視点とする社会科授業構成の類型化を行っている。そして、教材構成の方法と教材活用の方法を観点として「認知的所与型教材活用」「認知的促進型教材活用」「認知的構築型教材活用」「協働的所与型教材活用」「協働的促進型教材活用」「協働的構築型教材活用」の6類型を提示している。第III章から第VIII章にかけて、それぞれの類型に該当する典型的な事例の分析を通じて、授業構成の形態と課題、意義を整理している。第IX章は、その整理に基づいて、情報読解力形成をめざすための社会科モデル授業、及び社会科関連プロジェクトモデル授業の開発を行っている。

本書の意義は、第一に、構成主義的アプローチの有効性を示すとともに、その視点から社会科授業構成の理論を分析する新たな枠組みを提示したことにある。第二の意義は、構成主義的アプローチを視点としながら、学習者主体の認識形成の方法としての社会科ウェビング法を提起したことである。そして、第三の意義は、構成主義的アプローチとしての社会科ウェビング法に基づくモデル授業を実証的に開発したことである。

本書では、關氏自らが行ったものも含め、多様な実践が分析の対象とされ理論化されている。また、構成主義的アプローチの理論に基づきながら実践を通じた授業開発がなされており、このような理論と実践を往還する研究方法論の具体を示したことも本書の大きな意義であろう。

社会系教科教育に携わる多くの教師・研究者が熟読吟味されることを期待したい。